

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

休み時間。私たちは、今までどおり、四人でひとつの机を囲む。明るい会話。笑い声。ぱつと見ただけじゃ、なんにも変わったところはない。いつもの、日常だ。

朱里は私のことを、グループから外そうとはしなかった。

意外なことに、芙美とりっちゃんには何も話していないように、ふたりとも「葉ー、教室移動するよー」なんて、ふつうに話しかけてくる。その流れで結局は、いつものように四人のままで行動する。そんな日々が、ここ数日はつづいていた。

だけど朱里が自分から、私に声をかけてくることはなくなつた。一緒に机を囲んでいても、朱里は芙美とりっちゃんにだけ、笑顔向ける。芙美とりっちゃんをばさんでその場を共有しながらも、私と朱里の間で直接言葉が交わされることは、ない。

なんで——なんて、そんなこと、聞くまでもない。

私がしおりと親しくするのを、朱里ははつきりと拒んでいる。それはもう、目に見えて明らかだった。その証拠に、私がしおりのほうを気にしていると、とがめるような朱里の視線が、すぐさま横顔に飛んでくる。まるで、牽制するみたいに。

少しずつ、だけど確実に、何かがずれ始めてる。

そして①それがいちばん、はつきりと目に見えて分かるのは、やっぱり、放課後の教室だった。

「おーい、朱里ー！」

人気がない、五人きりの教室の中に、朱里を呼ぶ甲高い声が響き渡る。

手を止めて顔を上げると、ドアの向こうから背の高いショートボブの女の子がぶんぶん手をふっていた。数秒前まで不機嫌そうに、パレットの上でべたべたと絵の具を溶いていた朱里は、とたんに顔をぱつと輝かせて、「ちーちゃん！」と、その子に駆け寄っていく。

——ああ、まただ。

のど元にごみ上げた苦い感情を、ため息とともにのみ下す。だけど、②心はざらりと毛羽立ったまま、ちっともおだやかになつてはくれなかった。きやははは、と廊下から聞こえてくる朱里たちの笑い声が、やたらと耳にさわる。

今日で、応援旗製作を始めてから六日目。

だけど、朱里がまともに活動に参加していたのは、最初の二日——いや、二日目も途中で帰ってしまったから、初日だけ、だった。

「あつれー？ もしかして朱里も応援旗で残ってんの？」と、隣のクラスの女子が、ひよっこりとうちのクラスの教室をのぞきこんできて言ったのは、今から、三日前のこと。どうやら朱里と同じバスケット部の子だったらしく、以来朱里はこれ幸いとばか

りに、連日、隣のクラスに入り浸るようになってしまったのだった。

——なんか……なんかやだ。こういうのって、すごく。心の奥でつぶやいて、私はぎゅっと奥歯をかみしめる。思っているだけじゃなくて、実際に言わなくちゃいけないんだ、と分かってはいるけれど、隣の教室へ踏み込んでいって、朱里を連れ戻すことを考えると、どうしても足がすくんだ。もしかすると、③私の煮え切らないところを、朱里は「やさしい」と言ったのかもしれない。

「葉子、大丈夫？」

私がよほど険しい顔をしていたんだろう。おずおずとしおりが話しかけてきて、私はようやく、はつとわれに返つた。

「……うん、平気」

かろうじて笑顔返すと、しおりも、ほつとしたように目元をゆるめた。

しおりとは、早朝の教室でしゃべつたのをきつかけに、じよじよにはあるけれど言葉を交わすようになっていた。ぎこちなさはまだ完全に消えてはいないし、しおりのほうに壁を感じることときどきある。だけど、「葉子」としおりが呼んでくれるようになったことだけで、今は十分にうれしかった。

それに——絵を描くことは、やっぱり、すごく楽しかったんだ。

普段はめつたに使わないような大きな刷毛で、思い切り、ましろ白いところをすうつとなぞる。そうすると、心にあったもやもやも、自分のふがいなさも、全部ぜんぶ、ざあつと流されていくような気がした。百井くんと松村さんは、細かい作業が苦手なようで、細筆を使って描くところは、私としおりのふたりでやった。息をつめて、筆先に集中して、丁寧に色をつけていく。そうして、ふうつと息を吐いて筆先を持ち上げる瞬間は、急に視界が広くなって、清々しい気持ちになれる。

作業を終えて、片付けをしている時に、

「だいぶ、進んだね」

と、うれしそうに百井くんが言った。「頑張れば、明日か明後日には完成するんじゃないかなあ」と松村さんがあいづちを打ち、私としおりも、笑顔でうなずく。応援旗を見下ろせば、パステルカラーの空の中に、まだ白いままのクジラのシルエツトがくつきりと浮かび上がっていた。

——どうか無事に、この絵が完成しますように。祈るようにそう思いながら、私はそつと、教室のドアを閉める。

事件が起きたのは、その翌日のことだった。

午後四時。外は、まだずいぶん明るくて、グラウンドからは野球部の掛け声が、中庭からはトランペットの音色が響いてい

[注意] 答えはすべて解答用紙に書きなさい。

る。作業を開始してまだ十分しか経っていないこともあって、その時教室にはまだ、朱里も含めた応援旗係全員が顔をそろえていた。

そんな時、それは起こった。

## ④ 「あ」

ぼつ、と目の前で鮮やかな赤色の絵の具がしぶきのように散ったのと、松村さんが短い悲鳴を上げたのは、どっちが先だったんだろう。

——嘘。

気づいた時には、背景の空の上に、赤い絵の具が点々と散っていた。拭きとる間もなく、赤い絵の具はすうっと吸いこまれるようにシミになっていく。目の前には、赤く染まった筆をパレットに置いて、青ざめた顔をした松村さんの姿があった。

「ごめん！ ごめんなさい……」

一瞬、しん、と静まり返った教室の中で、だれよりも先に声を上げたのは、松村さん本人だった。今にも泣きだしそうな顔で、「どうしようどうしよう」とうろたえている。

実際、これはまずいかも、というのは、私自身も思ってしまったことだった。

上から塗り直したって、背景の色が薄いぶん、どうしても派手な赤色のほうが浮き出てしまう。ごまかそうとしても、かえって悪目立ちしてしまいそうだ。だけど今は、涙目になっている松村さんを責める気にはなれなかった。

大丈夫だよ、なんとかなるよ——。

そうフオローの言葉を口にしようとした。けれど、その時だった。

「えー、超目立つじゃん。どうすんの？ これ」

ロコッな物言いにぎよつと顔を上げると、さっきまで手持ちぶさたにしていた朱里が、すぐそばに立っていた。きれいに整った眉をひそめて、応援旗を見下ろしている。

「あ、でも、上から塗り直せば……」

おずおずと、百井くんが言いかける。

けれどそれを朱里は、「や、そこだけ塗り直しても、かえって目立つでしょ」とあつさり一蹴した。その一言に、松村さんはさらに耳を真っ赤にして、「ごめんなさい……」とうつむいてしまう。しおりが手を当てた松村さんの肩は、すでに、泣きだす寸前のように小さく震えている。

——なんで？ 朱里……。

思わず隣をふりあおぐと、朱里はもう他人事みたいにつまらなそうにそっぽを向いていた。

⑤ その瞬間、私の中で、何かが弾けた。

「朱里」

口を開くと、思ったよりも低い声が出て自分でも驚いた。朱里が、おつくうそうに首をもたげて私を見る。その視線にひるみそうになったけれど、私は、構わずに口を開く。

「……なんで、そういう言い方するの。それに、ずっとサボってたじゃん、朱里。こんな時だけ責めるのって、おかしいよ」言った。言ってしまった。

水を打ったような静けさの中で、カツン、と時計の針が動く音がした。しおりの、そして百井くんと松村さんの視線をひりひりと肌に感じる。怖い。怖くてたまらない。

「……何ソレ。なんであたしが、悪者みたいになつてんの？」抑揚のない声で言って、朱里がカバンをつかむ。そしてポニテールを揺らして、私をまつすぐに見た。少し前まで「葉！」と笑いかけてくれていた、勝ち気な猫みたいな瞳。でも今そこにあるのは、以前のような親しみじやなかった。

「日向」と「日陰」の境界線。それを朱里がたつた今、私の前に、完全に引いたことが、はつきりと分かった。

「……もういい。帰る」

そう吐き捨てる、ふり向きもせず、朱里は足早に歩いていってしまった。その背中を視線だけで追いかけているが、私は、そっと目をふせる。

泣きたかった。

だけど、泣かない、と思った。

だって、私は今、朱里に本当の気持ちを言った。そのことに、後悔はなかったから。

ゆっくりと深呼吸してふり向くと、しおりと最初に目が合った。心配そうなそのまなざしに、大丈夫だよ、というふうに、私はうなずいてみせる。

「佐古さん……ごめんなさい。私のせいで」

目を赤くした松村さんに、私はううん、と首をふった。それは、本当の気持ちだった。⑥ 私と朱里が衝突したのは、絶対に、松村さんのせいじゃない。

「……だけど、どうしようか。これ」

と百井くんがつぶやいて、私たちは改めて、赤く散らばったシミを見下ろした。

淡い色が混じり合った幻想的な空の中に、点々と散った鮮やかな赤。たしかに、そこだけ見れば、違和感はある。だけど、なんて鮮やかなんだろう。

そう思った時、びんと心にひらめくものがあった。そうだ、初めてしおりと出会った日、私たちの間を吹き抜けていった風と、ひらめく花びらと——。

「……花」

ぼつんとこぼした私のつぶやきに、三人が、いつせいに顔を上げる。

〔注意〕答えはすべて解答用紙に書きなさい。

受験番号

「花？」

首をかしげるしおりに、私は大きくうなずいた。

「そう。隠すんじゃないくて、デザインの一部にするのってどうかな。空に花びらが舞ってるようなイメージで全体に描きたして。そしたら、遠目からでも華やかに見えるし……」

そこまで言った時、みんなの視線が私に集まっているのを感じて、はっとした。遅ればせながら恥ずかしくなって、かっと頬がほてる。どうしよう。もしかして、おかしいことを言ってしまったのだろうか――。

けれど、その時。

「いいと思う。すく」

え、とまばたきをする私の前で、しおりがまっすぐ私にほほえみかけて言った。

「やろうよ、それ」

四人で頭をくつつけるようにして、空に、たくさんの花びらを描いた。そうして少しずつ暮れていく教室の中で、⑦私たちは、今まででいちばん、お互いのことをしゃべったと思う。

松村さんが吹奏楽部でホルンを吹いていること。最近、小学生の妹が生意気になって困ってるってこと。そんなことも、初めて知った。「生意気なのに、やっぱりかわいくて。くやしいけど」と、照れくさそうに笑う松村さんは、教室では見たことのない、「お姉さん」の顔をしていた。

百井くんは、あまり自分のことを話そうとはしなかったけれど、私たちの話ののんびりうなずいたりあいつちを打ってくれたりした。そのおだやかな横顔は、クラスの騒々しい男子たちとは、まるで雰囲気がちがう。そのせいだろうか、男子が苦手なはずのしおりまで、百井くんとはごく自然に言葉を交わしている。そのことに、びっくりした。

「瀬川さんは、将来、画家になるの？」

教室に差し込む光に夕暮れの色が混じり始めたころ、百井くんが、ふいにそう言った。

「……なんで？」

唐突な質問だったからだろう、ささやくように答えたしおりの頬が、さっと赤くなった。

「え。だって、いつも休み時間に絵、描いてるから。だから、そうなのかなって」

ごく当たり前のように、のんびりと笑って、百井くんは言った。

その言葉に、はっとする。今まで考えたこともなかったけれど、そういえば、百井くんは昼休みにどこで何をしているんだろう、と思つて。でも全然、思い浮かばない。そんなことさえ思い出せないぐらい、ごく近い、目の前の出来事しか自分には見えてなかったんだと思つて、ふいに恥ずかしくなった。

「……なりたいつて、思っている、けど」

やがてしおりが恥ずかしそうにそうつぶやくと、「うわあ、やつぱりそうなんだ」と、百井くんはうれしそうに、明るい声を上げて笑った。その声にしおりはいつそう顔を赤くして、「私、水換えてくるね」と、にぎった色水のバケツを片手に、そそくさと立ち上がる。しおりが教室を出ていったところで、「あの……」と松村さんが、遠慮がちに私のほうに顔を向けた。

「なに？」

「ううん。ただ、佐古さんと瀬川さんって仲よかったんだって。ちよつと意外だったから、その、びっくりして……」

「ごによごによつとそう言ってから、松村さんはあわてたように、」

「あ、でも悪い意味じゃなくて！ むしろいい意味で！」と、言葉をついだ。

「なんだか、見てて、本当の友達って感じがするから。だから、いいなって」

その一言に、驚いた。境界線を越えることが、私はずっと怖かった。⑧「日向」からはみ出そうとすることは、とがめられても仕方がないことなんだって、そう思っていた。だけど、いいな、と松村さんは言ってくれた。心を込めて。

「うん。小学校が一緒で。その時から……親友で」

親友、という言葉を使っているのか、しおりが今もそう思ってくれているのか、それは私には分からない。でも、そうだったらいいい。そう思つて、私は言った。

「へえ、いいなあ。そういう友達」

百井くんが間のびした声で言つて、のんびりと笑う。私はうなずいて、応援旗に目を落とす。

花びらの舞う空の中を、悠々と泳いでいく大きなクジラ。

どこにでも行けそうな自由さが、その絵からは伝わってくる。

私もいつか、そんなふうになれるだろうか――。

そう胸の内ではつぶやいたら、⑨教室に差し込む夕陽が、かすかに目にしみた。

(水野瑠見『十四歳日和』)

問 1 傍線①「それ」はどのような内容を表しているのか、説明しなさい。

問 2 傍線②「心はざらりと毛羽立ったまま、ちつともおだやかになってはくれなかった」とあるが、これは、「私」のどのような心の状態を表しているのか、説明しなさい。

問 3 傍線③「私の煮え切らないところ」とは、どのようなところか、説明しなさい。

問 4 ④では赤い絵の具が繰り返し描かれている。このことから、作者がどのようなことを表現しようとしていると考えられるか、説明しなさい。

問 5 傍線⑤「その瞬間、私の中で、何かが弾けた」とあるが、それはなぜか、順を追って説明しなさい。

問 6 傍線⑥「私と朱里が衝突したのは、絶対に、松村さんのせいじゃない」とあるが、「私」は自分と朱里が衝突した理由をどのようにとらえていると考えられるか、説明しなさい。

問 7 傍線⑦「私たちは、今まででいちばん、お互いのことをしゃべったと思う」とあるが、「私たち」みんなが、「今まででいちばん、お互いのことをしゃべった」のはなぜだと考えられるか、説明しなさい。

問 8 傍線⑧『日向』からはみ出そうとすることは、とがめられても仕方ないことなんだって、そう思っていた」とあるが、1、『日向』からはみ出」すとはどのようなことか、説明しなさい。

2、なぜ「私」は「そう思っていた」のだと考えられるか、説明しなさい。

問 9 傍線⑨「教室に差し込む夕陽が、かすかに目にしみた」とあるが、このときの「私」の気持ちを、文章全体をふまえて説明しなさい。

□ 次の傍線のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

① 総理大臣がカクギを開く。 ② 保育所をニンカする。 ③ 負担をケイゲンする。 ④ ウミガメのサンラン。

⑤ 力の差がレキゼンとしている。 ⑥ 意味シンチョウな態度。 ⑦ 試合でムハイを保つ。 ⑧ タントウ直入に聞く。

⑨ 農業用のチョスイチ。 ⑩ 土地をシソンに残す。 ⑪ 税額をサテイする。 ⑫ 牛馬のシリョウを輸入する。

⑬ デパートにキンムする。 ⑭ 税金をオサめる。 ⑮ 不足分をオギナう。 ⑯ 気骨のある若者。

⑰ 発奮して勉強する。 ⑱ 名簿に名を連ねる。 ⑲ 社会的な地位を築く。 ⑳ 話し合いで合意に至る。

